

覚音寺千手観音菩薩立像と納入印仏

佐々木守俊（町田市立国際版画美術館）

ほとけの姿をあらわした小型の木版画である印仏は、平安時代末期から鎌倉時代の仏像の像内納入品として、特に注目すべきもののひとつである。従来の印仏研究では、簡便な多数作善という側面が強調される傾向があり、平安時代にはおもに個人の日課として、鎌倉時代にはしばしば勸進の目的で制作されたことが繰り返し指摘されてきた。但し、平安時代の印仏にも勸進の機能が見出されるように、既存の認識は再考の余地が多分にある。中でも、密教修法の一環として制作される印仏にまつわる問題は、じゅうぶんに検討されてきたとはいいがたい。

この視点に立つとき、造像過程における興味深い諸事情を垣間見させてくれる作例が、長野県・覚音寺千手観音菩薩立像である。納入品の木札に墨書された銘文は、本像が治承3年（1179）に、現在の大町市付近を拠点とする武士・仁科盛家を大施主として造立されたことや、覚音寺の歴史など、多くの内容を含む。その中で目を引くのが、千手観音陀羅尼と仏眼仏母大呪、そして「念誦数、大呪六千四百五十返、小呪十万返、造立間所作也」の記述である。造像中に真言が念誦された回数を明記する銘文は希少で、最近はあるべき作法にのっとり制作された「如法仏」の問題と関連づけられている。発表者はさらに、念誦にあたった僧侶の名前を列記した「念誦僧衆数」の箇所注目する。ここには9人も僧侶が名を連ねており、造像にあたって単に真言が誦されたにとどまらず、組織的な修法として念誦がおこなわれたという経緯をものがたる。念誦の回数のみならず、参加者をも詳述する姿勢からは、この造像において念誦が重視されていたことに加え、修法の具体的な実績を記憶にとどめようとする、本像をとりまく人々の意識が読みとれる。

この木札が納入された像内空間に、少なくとも1470体に達したと推定される、大量の千手観音立像印仏がともに安置された事実は見逃せない。平安時代末期の日記や寺院史料には、印仏と念誦が並行しておこなわれた記録が散見される。個人的な営みでは、九条兼実が安元元年（1175）に愛染明王真言を誦しながらその種子を印捺した記事が、『玉葉』に見られる。また、本格的な密教修法の場でも、印仏は制作された。修法の種類と度数、各種の真言を念誦した回数を書き留めて願主に提出する文書である巻数（かんず）の中には、印仏の制作を記録したものがある。例えば、安祥寺の実徹が仁平4年（1154）に50日間の不空罽索観音法を修した際、諸尊の真言を念誦するとともに、3500体の「印仏」を「奉摺」したことが『巻数集』より知られる。これは、相当な分量の版画が密教修法の過程で制作された形跡を示す重要な史料で、本像の納入印仏の制作環境を髣髴とさせる。

以上の事例より、印仏の制作と真言の念誦が親近性の強い営みと認知されていたことは明らかである。本像の造立に際しても中央の信仰が波及し、念誦に呼応するかたちで印仏の制作が進められていた可能性がうかがえる。そして、像内への木札と印仏の納入は、巻数において念誦の回数と印仏の員数を記したのと同様、より大きな効験を期待し、修法の事実を記録・保存することを目的にした行為と位置づけられるのである。